

弥勒で温泉と初詣で

12月31日(金)

期末考試(テスト)が27日から始まった。われわれ入門組は28日に王老師の『漢語総合』と饒(ラオ)老師の『漢語閲読』が終了し、31日の杜(ドウ)老師の『漢語口語』が最後の試験となった。と同時に、今年度上期の授業も終了し、明日から来年の3月1日まで冬休みとなる。『漢語総合』と『漢語閲読』は通常のペーパーテストだが、『漢語口語』はその名の通りペーパーテストに加えて、オーラルテストが課せられる。これまでに学習した中国語の表現を知識としてだけでなく、実際の発話能力も判定する。

8時半の試験開始とともに、2人または3人1組で別室に呼び出され、グループ対話をさせられた。私は韓国の金さん、車さんと同じグループ。実は、オーラルテストの内容は事前に指定されていたのだが、3人もその準備をしていなかった。なので杜老師はお冠、フリー会話をしろと命じられ、車さんがリーダーとなってなんとかその場を繕った。なにを喋ったのか覚えていない。その後、教室に戻ってペーパーテストを完了させた頃、杜老師が側にやってきて、最後に習った21課の課文(本文)を音読しろと言う。読み終えると杜老師が「うん!」と言って、金さんと車さんにも音読をさせた。あの「うん!」はなんだった



【上】黄金色に輝く「弥勒大仏」。初詣を中国でしようとは思わなかったが、朝の陽光を全身に受けた眩いばかりの輝きはさぞかしご利益の多いことだろう。【左】温泉行きがぎっかけてお世話になったタクシー運転手の武さん。

のだろうか?半信半疑の中で10時半過ぎ、すべてが終わった。

午後、王老師のかねてからの誘いで、全員でカラオケボックスへ。カラオケは世界中で人気があるようだ。ベトナム出身の4人組は皆20歳代というところもあって、1時半頃から6時近くまで歌いまくっていた。32歳のバッドさんが「世代が違います」と言うので、「私は化石世代だ」と言っていて二人して笑っていたら、突然、王老師が「さくらさくら」を歌えとリクエストされた。そんな曲は中国のカラオケにはないだろうと言ったところ、それが「ある」のである。仕方なく美声をお聞かせしたところ、王老師を筆頭にベトナム組の3女性が日本の草花だと称して踊りだした。なんだか妙になよなよした動作は外国映画に出てくる芸者の仕草と同じだった。映画の影響は恐ろしい。それにしても「さくらさくら」とは…。

昆明に来てから「50人インタビュー」に取り組んでいる。50人を目標に中国のごく普通の人々に関するいろいろな質問をして、中国人の心情のようなのを探りたいと思ひ、始めた。その質問項目の中に「日本を知っていますか。日本をどう思いますか」を入れた。さすがに「フジヤマ、ゲイシャ」はないが、かなりの人が「富士山、桜、科学技術、清潔」を上げている。日本と桜は強く意識づけられているようだ。日本の好印象を大切にしたいと思う。

6時過ぎ、カラオケ大会終了。王老師はこれから大理へ小旅行。クラスメイトが「来年会えないのが寂しい」と言ってくれる。名残を惜しんで別

れた。

20時過ぎ、Kawana Cafeで再度バッドさんと落ち合い、明日の弥勒(ミシ)行きと1月半ばからの西双版纳(シーサンパンナ)放浪旅行の相談。その後には大晦日の南屏街見物を約束していたが、急に寒気が酷くなってきたので、バッドさんには申しわけなかったが帰宅しそのままベッドに潜り込んだ。23時頃、バッドさんからのメールを受信。クリスマススイヴほどの騒ぎではないが、ステージが設けられていて、ロックバンドのライブがそこそこの賑わいだという。しばらくして打ち上げ花火の音が連続して聞こえたので、それが午前0時だったのだろう。除夜の鐘の音は聞こえなかった。

1月1日(土)、2日(日)

昆明の空は快晴。気分爽快な元旦を迎えた。昨日大事を取ったことが功を奏したようだ。8時過ぎ、東部バスターミナルへ向かう。通りはいつもならばプルーギーヤーと騒々しい時間帯だが、正月となるとやはり静かで、どことなく閑静だ。正月はいずれも同じなのだ納得する。ただし、今日から中国全土で公共の場所での喫煙が全面禁止となったことを除いて。

弥勒は昆明の南東約150キロ、紅河哈尼(ハニ)族(イ)族自治州に属する古い街で、饒老師の生まれ故郷でもある。老師の話では格別の観光名所があるわけではないが、なんと嬉しいことに「温泉」があるのだそうだ。饒老師が正月帰省するということで、バッドさんともども「温泉」の一言に惹かれて「便乗しよう!」となった。

14時過ぎ、弥勒に到着。饒老師の案内で地元の彝族料理店で遅い昼食を堪能した後、老師と別れてわれわれは市街散策。なんの変哲もない街である。それでも通りは人と車が溢れ、その脇を水牛に牽かされた荷車が通って行く。公園は人でごった返し、元旦の華やかさと賑やかさが漂っている。

17時頃、ともかく温泉に入ろうと、タクシーをつかまえて交渉開始。なかなか通じな

いのでノートに「吉山温泉」と書いて見せたところ、「没有吉山温泉、只有温泉」と返答が帰ってきた。さっぱり通じないので、バッドさんが饒老師に電話を入れ運転手さんに手渡ししたところ、ようやく双方の意図が通じ、無事に温泉まで連れて行ってくれた。弥勒の温泉には日本のような「〇温泉」という固有名詞はなく、ただ「温泉」とだけ呼んでいることがわかった。この運転手さん、名前を武榮偉(ウーロンウェイ)さんという、温泉を出たら電話しろと携帯電話の番号を覚えてくれた。バッドさん共々初めは高額な料金を請求されるのではないかと警戒していたが、メーター通りの片道15元。どうやら信用できそうな人だと意見が一致した。

弥勒の温泉は湖の畔にある。洒落た建物と小高い丘の中にくつももの露天風呂が設けられた、まさにリゾート温泉である。中国はほんとうに変わったと感じさせられる。日本と唯一違うのは水着を着て入浴することだけで、その他は長野や群馬の日帰り温泉施設と変わらない。入場料60元。バッドさんは初めての温泉体験。私は4ヶ月ぶりのお風呂を堪能した。肩まで湯に浸かって夕焼け空を眺めていると日本にいるような錯覚に陥り、まわりから聞こえてくる中国語で現実に戻った。温泉からの帰り道、武さんに「便宜又安全(安くて安全な)ホテルを紹介してくれと頼んだところ、連れて行ってくれただけでなく仲介までしてくれた。宿泊料金が1室2人で60元の綺麗な酒店だった。別れ際、明日弥勒大仏に行きたいというわれわれの要望に、大仏様と弥勒市内を60元で往復してくれることになった。

23時半頃だったろうか、チェックインの後、遅い夕食を付近の食堂で済ませて酒店に戻ると、酒店のマネージャー氏が追いかけてきて、パスポートを確認させてくれという。私はしっかりと持参していたが、バッドさんは学生寮に置いてきたと暢気な顔をしていた。マネージャー氏、少々慌てた様子で「こんな時間に大変申しわけないが公安警察署までいっしょに行ってください」と低頭して曰くのだ。そこではたと思い出した。中国では居住地以外の街に宿泊する場合、身分証明書の提示が義務付けられている。外国人の場合は必ずパスポートを提示し、中にはチェックアウトまで預けるともある。これは厄介なことになった」と言いつつ、二人して「どんな仕儀になるのか興味津々」とマネージャー氏の運転する車で暗闇の弥勒の街を公安警察署へと向かった。

公安警察署は商店街の一角にあった。夜間警備室で待たされること40分余り。ようやく私服の警官がやってきてマネージャー氏から事情聴取。そうか!と頷いて部屋から出て行った。またまた待たされること20分余り。今度は書類を持って現

れ、私のパスポートとバッドさんの学生証の提出を求め、書類になにやら書き込んだ後、パスポートと学生証を返してくれて、「帰ってよし」と放免された。この間、玄関ロビーには若い女性2人が床にしゃがんだまま頭を垂れていた。2人の正面には、2人の持ち物と思われる財布やハンカチなどが並べられていた。バッドさん曰く、「多分、特殊なお仕事をしている女性でしょう」と。かりにそうであったとしても、あれでは「晒しもの」ではないだろうか。「所変われば品変わる」とはいうが、中国の人権意識には理解しがたいものがある。酒店への帰り道、マネージャー氏には余計な手間暇をかせがせてしまっして申しわけなかったが、「夜中に公安警察に行くなんて、できそうできない経験だね」と2人で笑った。

2日午前10時過ぎ、武さんが迎えにきてくれて弥勒大仏へ。弥勒市内から国道を30分ほど行き脇道に入ると直ぐ、正面の山の頂きに黄金色の巨大な姿が見えた。帰りの迎えを武さんと約束した後、かなりの勾配の階段を休み休みしながら頂上に到着。バッドさんは初めて見る大仏に驚いていた。その大きさとバッドさん曰く「成金色」に。屋過ぎ、武さんから電話が入った。下に降りて来るのは何時頃かと。2時頃になると応え、その時間に迎えに行くといってくれた。2時少し前、駐車場を待っていると、農道を結構な速度で走ってくる武さんのタクシーが見えた。市内まで送ってもらって別れ際、市内にいる間になにか困ったことがあったら携帯に電話しろと再度いってくれた。見かけによらず、武さんはとても親切で誠実な人だった。

1月3日(月)

中国中央電視台の国際放送で、2011年の国際情勢のトップに日本を取り上げていた。日本の経済の動きと朝鮮半島の危機の中で日本がどう対応するかを専門家が分析しているようだった。中国中央電視台が国際関係のトップに日本を上げていることに少々驚いたが、日本を重視していることの現れでもあると嬉しかった。

その一方でユーロ危機に瀕するヨーロッパ、中でもスペイン、ギリシャ、ドイツ、フランスは中国との関係を急速に強めている。バッドさんの話ではヨーロッパではこれまでのアメリカ依存を否定する人が多く、いまや世界第2の経済大国となった中国に対する期待が進んでいるらしい。師範大学の留学生の中にも東ヨーロッパやイギリス、カナダ、イスラエルの学生が非常に多い。そのうちの幾人かに聞いたところ、中国留学の目的は将来の対中国ビジネスの準備と答えている。いろいろな国の人と接していると、中国が確実に世界の中心になりつつあることを感じる。